



落葉樹の落葉で腐葉土づくり



阿武隈の山並みに見える

里山の歴史と再生への道

人々が適度に働きかけることによって、里山は多様な植生を育み多くの恵みをもたらしてくる。このことを忘れてはならない。

はじめに

里山は地域らしさの主要な要素であり、ひいては日本の原風景です。一つの里山は、五十種以上の樹木と百種以上の野草で構成されています。この一山で「五十木百草（いそぎ・ももくさ）」という多様な植生が、多様な美しさと豊かな生態系を創り出しています。

阿武隈山地は、何千年にもわたって、人が関わってきた里山です。縄文時代の遺跡も数多く発見されていますし、今でも山の奥深くまで散村が点在しています。人々は、幾代にもわたって里山から恵みをいただきながら生活し、また里山も人の手が入ることによって、豊かな植生が維持されてきました。

ところが近年、人と里山の関わりが薄れ、里山が荒れてきています。荒れた里山を再生させるためには、里山の文化を歴史に学びながら、新しい生業を起す必要があります。

里山の植物文化

江戸時代の一七三五年（享保二十）から一七三九年（元文四）に作成された「産物帳」である「陸奥国田村郡三春秋田信濃守領地草木鳥獣諸色集書」（以下「三春領地諸色集書」と略す）には、食べられる里山植物が記録されています。当時三春藩で食料とした里山植物は、木類三十一種、草類四十八種、合計七十九種です。会津若松市御薬園では、会津松平藩二代目藩主正経が薬草を栽培して以来、現在でも四百種の薬草が栽培されています。これらを参考にすると、人々は「五十木百草」に密接に関わり、里山植物のほとんどを食べたり薬として利用する植物文化を形成してきた、といえます。

里山の歴史

「三春領地諸色集書」には三春の特産として、馬と柶炭（常葉山炭）が記されていますが、これらは里山の生業、いわゆる「里山業」となるものです。

■石川町

仲田 茂司

馬産は三春だけでなく、阿武隈山地で広く行われていたようです。石川町には、草刈場（秣場）争いを示す江戸時代後期の古文書が多く残されています。

江戸時代に重要な里山業であった馬産と炭焼きは、明治の日清戦争頃から昭和の第二次世界大戦頃まで、軍用馬と暖房用として軍需が高まりました。

石川町中田生まれの大竹亀蔵（一八七一〜一九四八）は、一九二五年（大正十四）に福島県製炭指導員となり、大竹式炭窯を開発しました。この炭窯では、火持ちのよい硬質炭を生産することができ、また、硬質炭は運搬にも適し、鉄道を利用した首都圏への供給はもとより、軍需により大陸への供給も盛んとなりました。大竹式炭窯は北関東と東北各地に広く採用されていきます。

里山業としての馬産と炭焼きは、里山の多様な植生を育んできました。馬産には広い草刈場が必要です。そこ



アゼターフの生産



では馬が草を食んだり飼いが飼料用の草を刈るため、スキなど成長の早い植物が適度にコントロールされて他の植物と共生し、多様な植生が形成されます。

炭焼きは、樹木を定期的に更新することから、下草・中低木・高木という多様な植生がバランスよく形成されます。里山は、更新されないと高木が繁り、日陰となった林床は植生が貧困となります。

さて、江戸時代の宝暦年間（一七五十一〜一七六四）に、竹貫村（現・古殿町）の松川庄左衛門は、松川葉を開発しました。これによって阿武隈山地は江戸時代から近年にかけて煙草葉の主産地となっ
ていきます。煙草葉生産には、苗床に多量の落葉樹の腐葉土を使用します。落ち葉を集めるためには、林床を刈り払う必要があり、このことによっても里山の多様な植生が創りだされました。

里山の再生

馬産と炭焼きは、第二次大戦後需要が低迷し、特に馬産はほとんどなくなりま
した。また煙草葉生産も、近年外国産に
押されて減少しました。その結果、管理
されなくなった多くの里山は、クズやア
ズマネザサ、帰化植物などによって、他
の植物が駆逐されて植生が貧困となり、
荒れてきました。石川町中田にある標高
六百十六メートルの「二本ブナ」と呼ば
れる山は、昭和初期には草刈場として利

用されてきました。その後、地元の造林組合が現在に至るまで年に数回草を刈り
管理してきました。その結果、阿武隈山
地では貴重なニッコウキスゲやスズラン
などが自生し、多様な植生が維持されて
います。しかし、人手の入らない周辺の
里山は、やはり荒れてきています。

中田区は、郷土芸能「ささら」の継承
など、これまで様々な地域資産を発掘し
活用を図ってきました。二〇〇二年から
は、「二本ブナ」の整備にも取り組み、樹
木の間伐、ブナの植栽、歩道の整備など
を手がけています。この事業には、地元
の県立石川高校の生徒も、総合学習の一
環として参加しています。中田区の試み
は里山の整備だけでなく、里山文化を継
承発展させようというもので、同時に環
境教育も行っていることから、全国的に
高い評価を受け、二〇〇三年には読売新
聞社と環境省共催の「日本の里地里山30
―保全活動コンテスト」において受賞団
体の一つに選定されました。二〇〇四年
には、大竹式炭窯を再興し、高校生も炭
焼き体験に参加しています。

新しい里山業

里山を再生させる活動を持續するには、
中田区の里山再生事業を体験した高校生
らが将来参加できる、新しい里山業を各
地に起こす必要があります。

一つの試みとして、植物生産の南仲田

種苗園では、環境デザインの株プランタ
ゴと「アゼターフ」を共同開発しました。
「アゼターフ」は、田んぼのアゼ道を覆
う多様な植物群を還元した植生マットで
す。このマットは、落葉樹の腐葉土を使
用した用土と里地里山から採種した種子
などから、一マットあたり十五種以上の
里山植物を含ませて創ります。

「アゼターフ」は、里山の多様な植生
を再評価し、腐葉土利用という里山の伝
統手法を、私たちが開発した植生マット
の最新技術で進化させたもので、新しい
里山業の一つといえるでしょう。

生産に取り組む私たちは、「アゼター
フ」を都市環境の改善に役立てるとも
に、新しい里山業として里山の再生に繋
げたいと願っています。「アゼターフ」に
よって、「都市と里山の環」を創るとい
うのが、私たちのコンセプトです。

「アゼターフ」を見た都市生活者から
「癒される」「安らぐ」「なつかしい」
という感想をいただいています。さらに
「アゼターフ」に含まれる里山植物の一
つ一つが、食材や薬に利用されたという
植物文化にまで話が及ぶと、さらに身近
に感じていただけるようです。

◎なかだ・しげじ◎

昭和三十三年、石川町生まれ。有限会社仲田
種苗園代表取締役、社団法人日本植木協会日
本列島植木植物園副委員長、同学術委員